九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

乳幼児を持つ母親の学習を支援する講座のあり方 : 福岡県立大学生涯福祉研究センターでの実践をとおして

林, ムツミ
福岡県立大学生涯福祉研究センター

https://doi.org/10.15017/9033

出版情報：生活体験学習研究. 3, pp.57-66, 2003-03-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第３号　57―66（2003）

乳幼児を持つ母親の学習を支援する講座のあり方

―福岡県立大学生涯福祉研究センターでの実践をとおして―

林　　ムツミ

A Promotion Method of the Course which Supports the Learning of Mothers with Dependent Children

―Through the Practice in the Lifelong Development and Welfare Research Center of the Fukuoka Prefectural University―

Hayashi　Mutsumi

要旨　母親は、子育ての中で生じる様々な問題や悩みを解決する糸口を見つけるために、家庭から外に出て学習しようとする。専門家の講演を聞いたり他の母親の話を聞いたり、自分の話をする機会を持ったりする。そうした活動は、自分らしく子育てをすることや子ども・親・地域・社会等への視野を広げることにつながる。しかし、乳幼児を抱えた母親が家庭から外に出かけようとするとき、母親を取り巻く家庭や近隣・地域の人々の見方は必ずしも好意的ではない。専業主婦という枠組みでの見方や子どもを泣かせてまで学習したいのかという母親への風当たりが強いのが現状であろう。また、母親自身の子どもへの感情が、学びの状況を作ることをあきらめさせていることもある。

本稿は、子育ての当事者としての時期だからこそ母親の学習ニーズや意欲は高く、学ぶことの意味も大きいということをふまえ、母親が学習しやすい場の設定をどのようにしたらよいのかを、実践に基づいて述べている。

キーワード　乳幼児を持つ母親の学習、講座、当事者のニーズ、在宅保育

はじめに

今、家族や地域の変貌、ライフスタイルの変化等により、「子育てが大変」な時代であると言われている。従来であれば自然な形で得られていた子育ての環境が、身近に体験できないからである。近年、働く母親に対して在宅で子育てをしている母親の方が育児不安を抱きやすいということが認識されるようになり、在宅の母親が子育てに関する識見を広め「子育ての大変さ」が軽減できるように講演会や講座等が託児付で開催されることが多くなってきた。しかし母親達が「子どもに手がかかって大変」な時期に学習の場を求めて出かけようとするとき、参加への意欲に反して、参加するかどうかの判断で迷ってしまう。子どもを託児に預けてまでも学習することへの後ろめたさ。子どもが親から離れられるようになってから学習すればいいのではないか、母親のわがままではないかという思いもある。泣いている子どもに接している保育者からも、非難の言葉をさりげなく言われ傷つくこともある。主婦は家庭の中にあって家を守るべきという性別役割意識が残る中で、度々子どもを連れて出かけることへの周囲の視線も痛い。身近な夫や舅姑等の理解が得にくかったり、地域での関係が希薄になってきたとはいえ近隣の目も気になるのである。そのように、子育て中の母親は、当事者としての学習ニーズに反して、学習の場に

連絡・別刷り請求先（Corresponding author）
福岡県立大学生涯福祉研究センター（〒825-8585 田川市大字伊田4395）
Fukuoka Prefectural University Lifelong Development and Welfare Research Center (4395 Ita, Tagawa-shi, Fukuoka, Japan 825-8585)

参加しにくい実状がある。

大阪府貝塚市立公民館では「母親は子育てが終わってから学習すればいい、との考えがまだ根強かったこの保守的な地域において、子育て真っ最中だからこそ学ばなくてはならないことがある女性の学習権の視点から、『親子教室』が保育付きで開講されました」(注1)とあるように、すでに27年前（1975年）から、子どもを預けながらの学習の場を設けていた。また、講座終了後にできた自主学習グループが「なぜ子どもを預けてでも学ぶの？いっしょに、公民館保育を考えてみませんか？」と題した講座も開催している（1990年）。そうした実践から十数年経てもなお、母親が気兼ねなく自らの意志で学習に参加できる状況が作られていないのが現状であろう。

そこで、福岡県立大学生涯福祉研究センターで実施した、「親子でえんじょい『子育てひろば』」（以下「子育てひろば」）の実践（1999年度～2001年度）をもとに、乳幼児を持つ母親の学習の場である講座をどのような形で進めたら、母親達が参加しやすいのか、また積極的に参加できる場になるのかを、実践と講座受講生へのアンケート調査の結果から探ることにする。

１．田川地域における母親の学習

福岡県立大学生涯福祉研究センターが位置している田川地域では1993年頃から子育てサークルができはじめ、1997年には公民館等を利用した８つのサークルが活動していた。子育てサークルができるきっかけは、子どもを持つ母親を対象にした託児付き講座である。少子化で子ども連れ同士が地域で出会う機会が少なくなり、行政が主催する講座が同年齢の子どもを持つ他の親と知り合いになれる場としての役割を果たしたのである。さらに、1998年には、それぞれのサークルが一つになって「田川地区子育てネットワーク『たんたん』ができた。「たんたん」は、運動会や観劇会、講座等を主催し親子が出会え、学習する場を作っていく一つの流れになった。

２．「子育てひろば」について

1998年４月、福岡県立大学はそれまでの附属幼稚園を閉園、発展的改組としての生涯福祉研究センター（以下「センター」）を設置した。学内措置による施設である。「センター」は、学部教授兼務のセンター長、専任研究員（講師）１名、助手２名の職員構成である。専任の教員に加えて、福祉用具・子育て・町づくりの３部門を柱立てに、幾つかの研究プロジェクトに関係する専門分野の教員が学部から参加している。研究プロジェクトは学内のみならず、産業・行政・地域等と連携・共同しての研究活動を行っている。

「子育てひろば」は、「センター」共催で、「子育て支援システム研究プロジェクト（代表 福岡県立大学教授 古橋啓介）の事業である。主催は田川市教育委員会で、2000（平成12）年度･2001（平成13）年度は、『子育てひろば』実行委員会」を組織し、母親達にも参画してもらった。

３．「子育てひろば」実施にあたって

⑴ 「子育てひろば」の概要

① 講座回数：７回～８回の講座で、一週間に１回（曜日不定）で実施

② 内容（１日の流れ）

・講義（10時～11時30分）

母親が講義を受けている間子どもは保育を受ける。

７～８回の講座のうち１～２回は、フリートーキングの実施。

・親子遊び（11時30分～12時）

地域で活動しているボランティアグループ・個人が、リトミック、絵本や人形劇等の実演、童謡ミニコンサート、親子製作活動などを実施。

・フリータイム（12時～13時）

弁当を食べたり交流したりする。自由参加。

・育児相談（12時～12時30分）

当日講義の講師が担当。

⑵ 実施に当たって乳幼児を持つ母親のニーズを探る。

講座実施にあって、乳幼児をもつ保護者であり子育てネットワークの関係者である、元「筑豊子育てネットワーク」相戸晴子さんと「田川地区子育てネットワーク『たんたん』」代表（当時）園眞紀子さんに、当事者としてのニーズの聞き取り調査を行った。

その結果、下記のようなことに留意して講座を実施した。

①講座は、親子で気楽に出かけられる場所にする

専業主婦は、子育てサークルや講座等の参加で度々出かけることへの後ろめたさが生じる。働いている母親はがんばっているのにとか、子どもが幼いうちは家庭内で母親が育児に専念すべきだということから、専業主婦の道楽と見られていることを感じるのである。そこで、自分自身の自己実現のためだけに子どもを連れだし託児に預け学習をするのではなく、子どもにとっても大切な体験の時間を得るために出かけるのだということで母親本人が納得し、家族や近所などの周囲にも説明できるものにすることが求められた。講座のキャッチコピーを「親子でえんじょい」とした所以である。母親の学習の場だけではなく、子どもも共に楽しみ体験し育つ場であることをアピールし、親子で気軽に気楽に出かけられる場所であるようにした。

②母親とともに子どもも育つ時間を保障する

母親が学習している間の子どもは、不安を我慢してただ待つのではなく、子どもの成長にとって必要な体験をする場であるという捉え方をした。核家族化・少子化等で同年齢の子どもとの関わりや異世代の人との関わりを持つことが難しい状況におかれた子ども達が、家族以外の人と出会い、空間と時間と経験を共有する体験を得る場である。これは、子どもを母親から離して、保育者が子どもを預かることを「託児」と言っていたのを「保育」という言い方にしたことに表れている。数年前、親子で遊ぶ場を探していた母親が、ある施設の図書室を使わせてほしいと願い出たら、「母親が学習するときに子どもが邪魔になるやろ。その子どもを置いておく場所で、遊び場とは違う。」と断られた事例のように、子どもを抜きにした母親の学習支援ではない。従って、予算上の問題もあるが、子どもの年齢や状態に合わせた保育者の人数をできるだけ確保する方向で行政に働きかけた。

「保育」のプログラムはおおむね以下のパターンである。最初に自由遊びで、自然に母親から離れ遊びの中に入れるようにした。次に、ある程度遊んだところで絵本の読み語りやペープサート、手遊びや指遊びを取り入れたりしての保育スタッフが進める遊び。これは、年齢・経験・その場への適応状況など子どもの状態に差があるので、直接的・間接的経験のいずれかができるように設定し、無理をしないで自然に入り込めるようにした。さらに、ほっとできるおやつタイムをとった。母親から離れて１時間以上も経つと、遊びが盛り上がる子どもとそろそろ疲れが出始める子どもとに分かれる。その頃を見計らって、おやつ一口とお茶で喉を潤すと、子どもたちはまた落ち着いて遊び始める。おやつタイムは、常に子どもに目配り気配りをして緊張している保育スタッフもほっとできる一瞬でもある。おやつが終わると子どもたちは、また思い思いに遊び始め、やがて母親が迎えにきて、その場で、次のプログラムの「親子遊び」に入るようにした。

③講義内容の配置を工夫する

現代の母親は、受験戦争という言葉が示す社会背景の中で学童期や青年期を過ごしてきた世代である。そのような人達が母親になり、核家族化、地域社会のつながりの希薄化という中で、子育てのモデルも助言者もいなく孤立した子育てをする状況に置かれることが多くなった。一方で、テレビや雑誌、インターネットなどでの仮想世界での子育て情報は氾濫している。それらの情報は一方的で、情報を得たことで母親は混乱し育児不安を募らせていくという構図がある。そこで、心理学、教育学、実践現場等からのアプローチで、育児の疑問や不安・いらだちを、自分自身の力で問題整理・解決するヒントとしての情報提供するため、各分野の研究者の話を直接体験できる場として講義を企画した。

④お母さん同士がつながれるように企画する

公園に行っても草が生い茂り誰も遊んでいなく、行く場所がない。家の中で子どもだけと向き合い、夫が帰宅するまでは大人とは一言も会話をしない生活。子どもの遊び場と共に、母親も子育ての悩みや日常会話ができる相手がほしいと思う。自分と子どもだけとの密室状態の世界でなく話し相手、つまり子育ての仲間に出会いたいと願う。そうすれば社会との接点が少ないことからくる閉塞感、孤立感を解消、もしくは和らげることができるであろうということであった。そこで、フリートーキングやフリータイムを設定した。他の母親と子育ての状況や悩みを話したり子育てOBの話を聞いたりすることで、気持ちが軽くなり育児の不安感が和らぐ。そのことが育児ストレスの解消につな

がるのだと考えた。フリートーキングは１講座として実施した。フリートーキング講座のプログラムは以下のとおりである。①リズム遊びをして参加者同士のラポートをつける。自己紹介をし合ったりタッチングをしたりして、自然に和やかな雰囲気にしていく。②５～６人のグループになって、ミーテイングをする。話を進めやすいようにミーティングのテーマを決め、各グループに一人ずつリーダー役になる人を配置した。この場合、全体的なコーディネートをする人を１人配置した。

⑤受講の形を柔軟にする

働いている母親は、「子育ての大変さ」を抱えた家庭に加えて職場という別の世界を持っている。そのことで、家庭と職場との気持ちの切り替えができる。専業主婦に比べるとストレス度が低い所以である。しかし、専業主婦の母親は、24時間子どもと向き合って気持ちの切り替えができにくい。それで、気持ちをスイッチする時間を意図的に作る必要がある。さらに、子育ての不安感は年齢が低いほど強く、子どもの年齢が上がるに従って解消していく。子育てに対する不安感を払拭したいがために学習をしようとするが、学習ニーズが高いときには子どもが幼く、心情的に母子分離への抵抗感があるというジレンマに陥る母親もいる。そこで、保育に慣れないで終始泣き叫ぶ子どもや乳児を持つ母親は、傍に子どもを置いて一緒に講義を受けることができるようにした。子どもから離れる時間を作りたいという気持ち、子どもに無理をさせない形で学習をしたいという気持ちのいずれもが、子育て中の母親の気持ちである。母親の気持ちを受け止めて、講義の受け方を母親自身が選択できるようにした。いったん保育の中に入っていた子どもも、継続的に泣いていたら子どもの様子を見ながら、母親のそばに連れて行くなど柔軟な対応をした。母親が講義を受ける部屋は、半分を机・椅子にし、半分の床に敷物をして親子が一緒におれるようにした。また、講義室の隣の部屋を、子どもを遊ばせたり授乳したりしながらマイクを通して講義を聞くことができるようにした。このように、３つの形で講義を聞けるようにした。それは、講義中移動できるようにした。但し、この様な形での聴講は、講義をする講師の理解が必要である。

⑥体験的な講義を企画する

受け身で聞く講義と共にワークショップ形式の講義があると、母親達の物事への参加意欲が増すのではないかと考えた。そこで、1999（平成11）年度は、絵本やパネルシアター等、講師が実演するお話しや演じ方を、親子で楽しみながら学習した。布を使っての簡単なワッペンの製作も経験した。2000（平成12）年度には、講座で共に学ぶことから共に行動することで受講生同士が仲良くなり繋がることを目的に、「お祭ひろば」を開催した。受講生が中心になって「お祭り広場」実行委員会を組織し、企画・運営した。2001（平成13）年度は、身体を動かしながらの自己表現の仕方の講義を実施した。

⑦育児相談を設ける

母親は、子育て環境の中にアドバイスをしたりモデルとなる人がいない場合が多い。多くの悩みは、子育ての仲間や経験者に話し問題を整理することで自己解決の方向へ向かうが、専門的なアドバイスを得たいと

きもある。そこで30分間という短い時間ではあるが、講義の講師にアドバイザーとして、１講座につき２～３人の受講生の相談を受けていただいた。中には、講座終了後約１年間、子育て相談を継続していただき、育ちに大きな変化があった子どももいた。

⑧受講しやすい日程等にする

乳幼児を連れて外に出かけやすい条件は次のようなことである。土・日曜日は父親が家にいるので出かけにくく、平日が良い。子どもが昼寝をする午後は避けたい。家事などを手っ取り早く済ませて、子どもと出かけるゆとりができるのは、午前10時過ぎである。母親が聞く講義は１時間30分が限度で、それ以上だと集中力が落ちてくる。一方で子どもが保育に入り楽しく遊べる時間も１時間強が限界である。以上の事から、10時～11時30分を講義の時間とし、その間子どもは保育を受ける。11時30分～12時までを親子遊びの時間にし、親子が離れていた時間を取り戻すためにたっぷりと親子のスキンシップを図るという日程を組んだ。

⑨　広域での情報を得る機会を作る

講座の講師は、予算の関係で身近な範囲内で人選せざるを得ない。一方で、インターネットの普及や子育てネットワーク同士のつながりなどで、他地域での子育て関係の情報の収集が可能になってきた。情報収集しても、乳幼児を持つ母親達が、北九州市や関西等で活躍されている先生の話を聞きに出かけて行きにくい。幼い子どもを連れての移動が困難であり、専業主婦という立場で個人的に旅費を工面することの難しさ故である。そこで、地元で話が聞ける方法を考えることにした。2001（平成13）年度は、予算面や他地域での講演会とドッキングさせていただく等の行政の柔軟な対応で、関西でご活躍中の先生をお招きすることができた。これは、行政の姿勢もさることながら、他地域の子育てネットワークとの緩やかなつながりがあったからこそ実現できた事業といえよう。

⑩運営を実行委員会形式にした

初年度の「子育てひろば」は、子育てネットワーク関係の母親の聞き取りを参考にしながら、企画・運営を子育てプロジェクトがした。２年目からは、母親にも実行委員として参加してもらい、公的な立場で意見を出し、企画・運営に参画するようにした。

４．結果

⑴「子育て広場」参加者数

表１のとおり。

⑵　学習講座受講生へのアンケート調査結果からの検討

調査の目的：「子育てひろば」を受講しての感想や意見を探り、受講生の声を次の講座に活用。

調査項目：ⓐフェイスシートⓑ講座参加の動機・参加形態（一人、子ども連れ）ⓒ講座のプログラムについてⓓ子育て支援システムのあり方について

調査の手続き：

ⓐ調査対象：平成11年度「子育てひろば」受講生

ⓑ調査票調査：郵送法

ⓒ回収：配布数48部　回収数33部　回収率69％

調査の方法：調査は３年次毎回実施し、講座の最終日に調査票を配布した。３年次分の調査結果が得られたが、毎年受講している受講生についての重複を避けるため、ここでは初年度の調査結果のみを取り上げる。初年度分を取り上げる理由は、配布数回答数共に多かったため。

調査の結果

①　調査対象者の属性：「子育てひろば」の参加者は、ほとんどが母親で、20代後半から30代前半の年齢の人が多い。71歳の祖父の参加もあったが、親子遊び

表　1

	平成11年度（７回講座総参加者数）	平成12年度（６回講座総参加者数）	平成13年度（７回講座総参加者数）	合計
大　人	168	144	171（公開講演会を加算）	483
子ども	132	123	116	371
合　計	300	367（お祭り広場約100名を加算）	287	954

を孫と体験することが目的の参加である。居住地域は田川市が82％である。講座開催の会場が田川市に位置していることから乳幼児を連れて参加する講座は、できるだけ近い場所に位置していることが望まれる。

② 子育てサークル所属の有無を尋ねた項目では、６４％が子育てサークルに所属していると回答している。さらに、所属していないが例えば観劇会や運動会など子育てサークルが主催する行事には参加している人が21％で、合計85％の人が何らかの形で同年齢の子ども同士、母親が出会える場所に参加していることが分かる。初めて参加する人は３％、その他が12％である。（資料１）それら初めて参加する人等が、「子育てひろば」への参加をきっかけに、子育て仲間の輪を広げていくことを期待する。

③ 「子育てひろば」参加の動機について尋ねてみた。その結果、「子育ての知識を求めて」が40％、「子どもの遊び相手を求めて」が15％、「子育ての友だちを求めて」が９％、「地理的に良い場所にあるから」が９％、「出かける場所がほしかった」が９％、その他である。（資料２）学習することに期待している人、居場所を求めての人に大別される。「子育てひろば」受講生募集要項では日程の中に講義、フリートーキング、親子遊び、育児相談、フリータイム等のプログラムを全て表示している。毎回中心になる講義（毎年５回実施）もしくはフリートーキングに親子遊びや育児相談等を盛り込んでいく構成なので、参加動機が学ぶことにある母親が多いのは理解できる。子どもの発達や扱いについてなどの知識、他の親たちとのふれあい等は、子育て期の親たちの大切なニーズであり活動である(注2)。「子育て・子育ち・親育ち」と掲げている子育てネットワークの活動にも、親が学習することの必要性を、親自身が感じていることが示されていると言えよう。

資料１

所属の有無	人数
１．所属している	21
２．所属していないが参加	7
３．はじめて	1
４．その他	4
合　　計	33

資料２

問５．参加の動機	人数
１．子育ての知識	26
２．子育ての友達	6
３．子供の遊び相手	10
４．出かける場所	5
５．県大に来てみたかった	5
６．地理的に良い	6
７．その他	9
合　　計	67

＊複数回答

④子どもと一緒に参加したのか、大人だけが参加したのか、参加の仕方を尋ねた。その結果、82％（27名）の人が子どもと参加している。一人で参加した人は15％（５名）である。

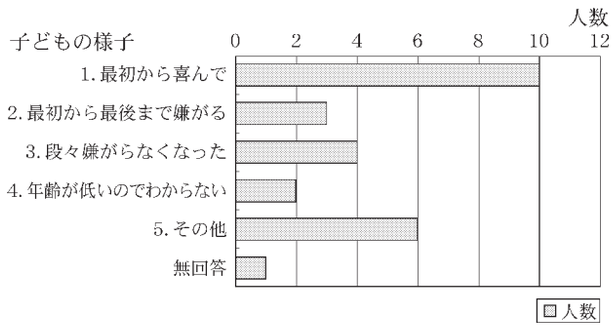
⑤ 子どもの保育参加を尋ねてみた。26名の子どもの内、69％（18名）の子どもが保育に参加し、31％（８名）の子どもが、聴講している母親の側にいた。

⑥ 子どもの人数を尋ねると、１人の人が88％（23名）で、２人の人が12％（３名）であった。このことは、母親の年齢とも関係し、第一子で子育て体験が浅く、不安や悩みを抱え込みやすい時に参加していると言えよう。

⑦ 参加した子どもの年齢と性別を尋ねた。２歳の子どもが一番多く12名である。子どもの動きや遊びが活発になり友だちとの関わりを持ち始める年齢の子どもである。子どもに動きが出てくる年齢になると、家庭の中だけで母親と一緒にいることが窮屈になり、子どもと共に外に出かけて行きたくなる傾向である。そこで子どもと母親が出かけていく居場所が必要になってくる。

⑧ 保育に参加した子どもの様子を尋ねてみた。（資料３）最初から喜んで保育に入った子どもが10人、段々嫌がらなくなったが４人、最初から最後まで嫌がった子どもが３人、年齢が低いので分からないが２人であった。保育定員25名に対して、10名前後の保育者が子ども達の中に入ったが、初日は特に、母子分離できない子どもの泣き声が響き渡り、気が紛れて泣きやんでいたがまた思い出して泣き出すというこ

資料３



との繰り返しで、母親が講義を受けている二階に連れて行くタイミングを捉えるのが難しかった。

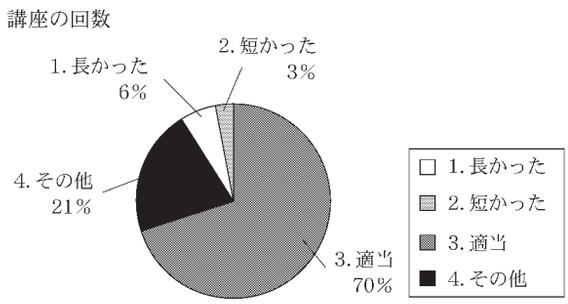
⑨　保育の中で、子どもの状況に合わせて遊びを取り入れたことに対しての子どもの反応を、自由記述で聞いた。それに対して、「子どもが楽しそうにしているのを見て、ただ預かるだけではないプロの保育に感心した。」「託児についてはいろいろなところで経験しているので抵抗はなかったが、今回のようにいろいろな遊びをしていただいた事はなかったので子どもも喜んでいた」とおおむね好意的な意見が33件寄せられた。

⑩　母親から離れられない子どもを無理に引き離して保育の中に入れるのではなく、離れられない子どもは母親の側にいてもいいという柔軟なやり方をしたことに対する意見を尋ねた。それに対して、「子どもの身になった今回の取り組みで、まだ親離れ子離れしていない私にとって本当に助かりました。」「子どもを泣かせてまで講義を聞くというのは、親自身もあまり安心して聞ける状態ではないと思います。一緒に聞いても良いという条件であればその方がいいと思います。」「親は、子どもが泣いていないかとても気になります。今回のようにあまり泣いている場合は連れてきてもらえば、来ないからうちの子は大丈夫なんだと安心してお話しを聞くことができました。とても良いことだと思います。」とこれもおおむね受け入れてもらえたようである。しかし、母親の側にいる子どもは、講義があっている１時間30分の間、じっとすることを強いることになるので、その間の子どもの時間をどう保障するのかということで課題が残る。

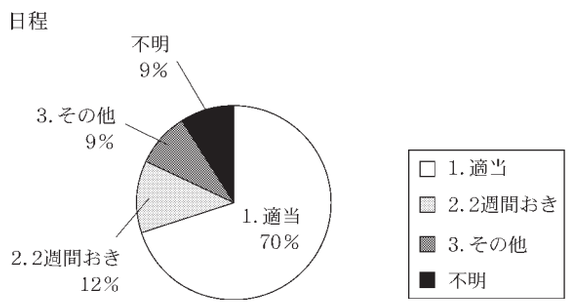
⑪　講座のプログラムについて尋ねた。７回講座を１週ごとに、平日の午前中にすることについては、概ね70％の人が適当と回答した。但し、日程を２週間置きでした方が良いと回答した人が12％いたことについての検討は必要であろう（資料４・５・６）。サークル活動をしている親子は、週に１～２回の活動日があり、それに加えての講座では出かける日にちが多くなる。出かけることに物理的な負担感が出てくる可能性がある。

⑫　１回の講座の内容を、講義、親子遊び、フリータイム等の流れにしたことについての時間配分について尋ねた。その結果、時間配分は適当だったと回答した人が79％であった（資料７）。時間配分についての回答結果は、同時に講座の内容をどのように考え

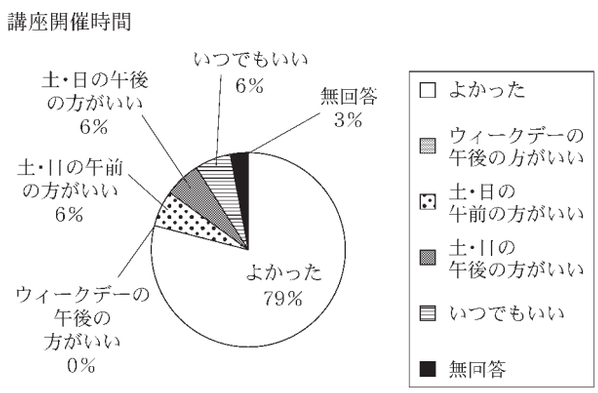
資料４



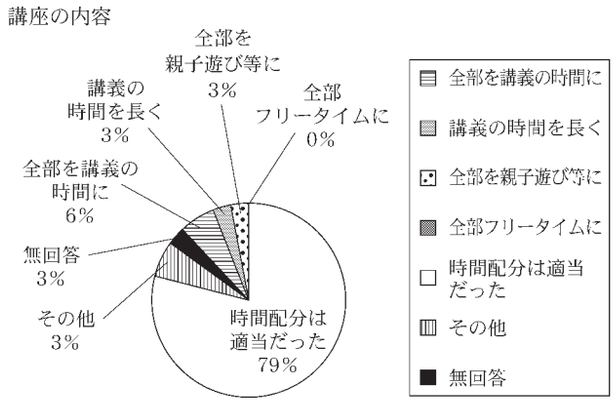
資料５



資料６



資料７



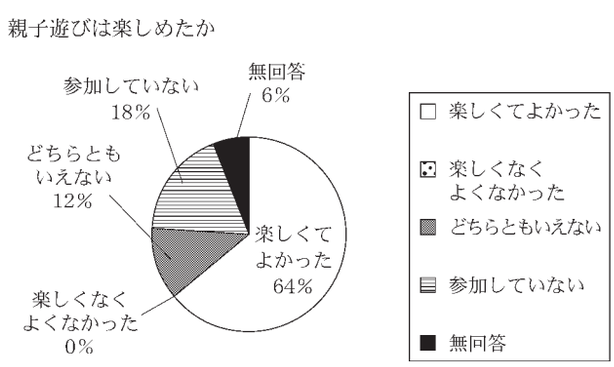
ているのかについての意見ともつながり、講義だけでなく親子遊びを入れることを支持された結果と考えて良いだろう。

⑬　親子遊びについての感想を尋ねた。親子遊びは、64％の母親が楽しくて良かったと回答している。参加していない人が18％になっているのは、子どもの年齢が親子遊びを楽しむまでいっていない０歳児の母親であったり、保育の疲れで子どもがぐずったり用事があったりして参加しなかったのが理由として挙げられる。（資料８）また、楽しくなく良くなかったと回答した人はいなかったが、親子遊びの感想を自由記述で尋ねると、「子どもがあまり参加しなかった」「子どもが積極的に参加せず困りました」などの記述があった。子どもの興味や経験の差があり、一律に親子遊びが楽しいとは言えない。但し、親子遊びを何度も経験することによって、絵本や人形劇を見たりすることの楽しさを体験し楽しめるようになるものと思っている。

⑭　フリータイムへの参加を尋ねた。61％の親子が参加している。フリータイムに参加した理由を尋ねると、「友だちも一緒だったので」「パン屋さんが来てパンが買えたので」「子どもがまだ遊びたい様子なので」「みんなと昼食をとりながら話がしたかったから」等、子ども側からと親側からの理由に分かれた。反対にフリータイムに参加しなかった理由は、「雰囲気になれてから」「子どもが帰りたがったから」「時間がなかったから」等の理由が挙がっていた。フリータイムの時の様子を観察するとサークル単位で交流してしまうので新たな出会いが、生じにくい状況があった。弁当を作るゆとりのない母親もフリータイムに参加しやすくするためにパンや弁当の注文をとったが、参加者数が増えることはなかった。

フリータイムであってもあまり表に出ないコーディネーター的役割を持つ人がいた方がよいのか課題が残った。

資料８



⑮　育児相談に対する意見・感想を、自由記述で尋ねた。「相談できる専門家をずっと捜していたので、参考になった」「とても親切にしてくれて嬉しかった」「相談したかったが、子どもに御飯を食べさせなくてはいけなかったので、機会を逃した」などの意見があった。被相談者を当日の講義の講師としたため、時間的な制約で相談時間をフリータイムが始まる12時からとした。それは昼食の時間の始まりでもあった。講師の活動の流れから、結局昼食時間と重なるような日程になってしまった。

⑯　「子育てひろば」に参加しての感想を尋ねると、「子育てに関する情報が得られた」「楽しい時間を送ることができた」の項目を回答する人が多かった。（資料９）母親は、情報や楽しい時間を体験することがで

資料９

子育て広場に参加しての感想

項　目	人数
子育てに関する情報が得られた	27
楽しい時間をおくることができた	25
お母さんに新しい友だちができた	2
子どもに新しい友だちができた	3
参加前と変わらない	3
その他	4
無回答	1

＊複数回答

資料10

今後どのような内容の講座を望むか

項　目	人数
講義形式で講師の話を聞く	22
少人数で討議	15
実践活動をする	20
他の保護者と知り合いになれるやり方	13
対象を分けるやり方	11
フリータイムを楽しむ	10
その他	4
無回答	1

＊複数回答

きたものの親子に新しい友だちができるなど新たな展開が少なかったことについての分析を深める必要があろう。

⑰　今後どのような内容の講座を望むか、どのようなテーマの講義を望むかについて尋ねた。講義形式で講師の話を聞くと回答した人が22名である。少人数で討議実践活動をする。他の保護者と知り合いになれるやり方の３つの項を選択した人が計48名であった。これらは母親たちが主体的に親としての力や自信をつけていこうとする意識を持っていることの表われととらえることはできないだろうか。

５．全体的考察

在宅で子育てをしている母親たちは、子育てに専念しているのだからきちんと子どもを育てて当たり前、それができない母親は母親失格という世間の重圧を受けている。専業主婦が子育てのストレスなんて贅沢な悩みだと言われる。しかし、実は専業主婦は閉塞的・孤立した子育てをしている。そして、しんどい状況を少しでも打開しようと子育ての知識や情報、交流を求めて、母親が少しずつ外へ出始めている。ところが、子どもを泣かせてまでも学習する必要はあるのか、子どもが大きくなってからでもいいのではないかという視線を浴びせられ、子どもに対する感情も伴い、母親として成長しようとする意欲に歯止めをかけざるを得ない状況に自分自身を追い込んでいくのである。

最近は行政や女性団体が実施している講演会などのチラシに、「託児付き」の文字が目に付くようになった。それは、乳幼児を持つ母親の学習の機会が設定されているということである。しかし、「託児付き」ということだけでは、母親が外に出かけて学習することを、周りだけでなく母親当事者をも納得させることはできない。母親と共に子どもも育つ環境が保障される必要がある。そのためには以下のことに留意して講座を実施する必要がある。①親子で気軽に出かけられる場所にする。②母親と共に子どもも育つ体験ができる時間を保障する。③母親のニーズにあった講義内容の配置をする。④母親同士が関わりを持ち深められるような場面を設定する。⑤体験的な講座内容も必要である。⑥広域での子育て期の母親同士の交流や子育てに関する話を聞いたりすることができるように支援する。⑦講座を実施する曜日･時間等も､子育て中の母親にとっては参加しやすいかどうかの条件になる。⑧全て母親が受身的な状態で受講するのではなく、能動的に活動する場を設定する。

以上のように、講座の内容、保育の内容、環境整備等で、学習しようとする母親を支援するための講座のあり方が問われる。

一般の講演会等で子どもの声がすると、周りの人が眉をひそめる光景を目にしたことがある｡｢子育てひろば」の場は同じような立場の人の集まりであり講師も受講生も、母親と子どもの姿を受容する姿勢がある。他のいろいろな世代の人が集まる場でも同じような状況が作りだせるように社会が変わっていくこと、それが一般的な状況になることが子育て中の母親達が学習しやすい状況を作っていくことにつながるのではなかろうか。

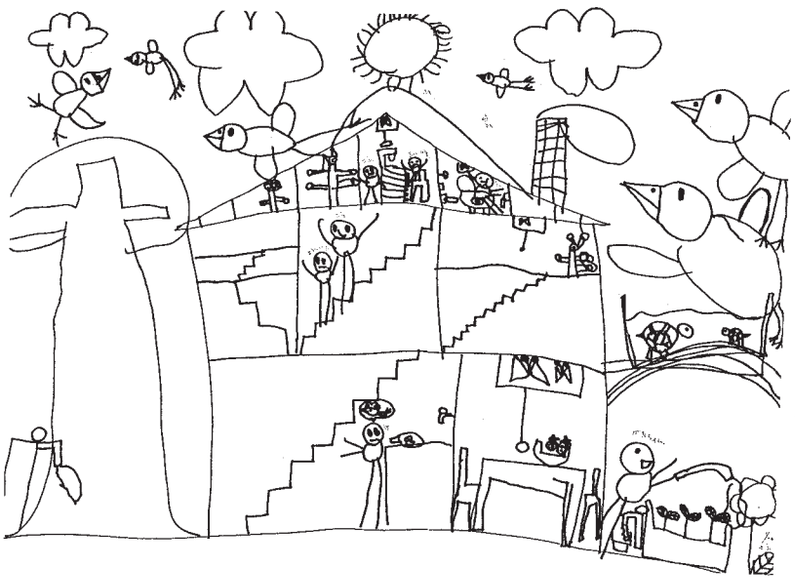
（注１）　文部省委嘱平成６年度「女性の社会参加支援特別推進事業」報告書女性による地域ネットワーク事業報告書女性による地域ネットワーク事業実行委員会

（注２）　「地域から生まれる支えあいの子育て」p.111 ひとなる書房　小出まみ

参考文献

① 「公民館で学ぶ自分づくりとまちづくり」長澤成次 国土社

② 「現代公民館の創造　公民館50年の歩みと展望」日本社会教育学会編

③ 「我が国の文教政策」(平成５年度)「文教発信社会」

に向けて（http://wwwwp.mext.go.jp/jky1993/index.html）
④「育児不安の構造(2)」東京聖徳短期大学専攻科幼児教育専攻・年報「子育て支援」Vol 2
⑤「子ども・若者と社会教育―自己形成の場と関係性の変容―」日本社会教育学会編
⑥「子ども社会研究」日本子ども社会学会編